

## えひめの歴史文化モノ語り

## 県歴博収蔵資料から⑨

一昨年、世界遺産に登録された大阪の「百舌鳥・古市古墳群」が築造された主要な時期は5世紀で、巨大な前方後円墳が近畿地方を中心に築造された古墳時代中期である。この時期の松山平野の状況を示すのが今回紹介す

骨一体とともに出土した。直径12・2センチの鏡には、5体の獣像を中心とした文様が表現されている。当時の日本列島で製作された倭鏡、仿製鏡（ぼうせいぎょ）と呼ばれるものである。獣像は、観察すると嘴（くちばし）や翼があり、2体は鳥を表現していると考えられる。筆者がこの鏡に興味を持ったのは、約10年前に報告書が刊行された兵庫県朝来市の茶すり山古墳から出土した朝日谷2号墳もあり、中期になると、首長墓と想定される大規模な古墳が松山平野では築造されなくなり、その象徴が津田山から出土した倭鏡ではないだろうか。つまり、大規模な古墳を築造せずとも、ヤマト政権との何らかのつながりを有した被葬者がこの地にいたと考えている。約50年前に発見された資料であるが、その後の類似資料の発見により、評価や問題点は変化することがあることを実感している。

## ヤマト政権との縁を示す

ら類似資料が出土していることが知られている。

同古墳は、古墳時代中期の径約90センチの円墳で、2領の甲冑（かっちゅう）や計19本の刀剣、計4面の銅鏡などの副葬品からヤマト政権と密接な関係にあった5世紀前半の但馬の王墓に位置づけられる。同古墳から出土した銅鏡は、古墳時代前期後半に作られ、配布主体のヤマト政権で長期間保有され、中期に配布・副葬されたと考えられている。

（専門学芸員・富田尚夫）  
〈随時掲載します〉

## 松山・津田山古墳出土の仿製獣帯鏡



箱式石棺に副葬された倭鏡（愛媛県教育委員会蔵、県歴史文化博物館保管）

2021. 4. 10  
I K X